2023年度

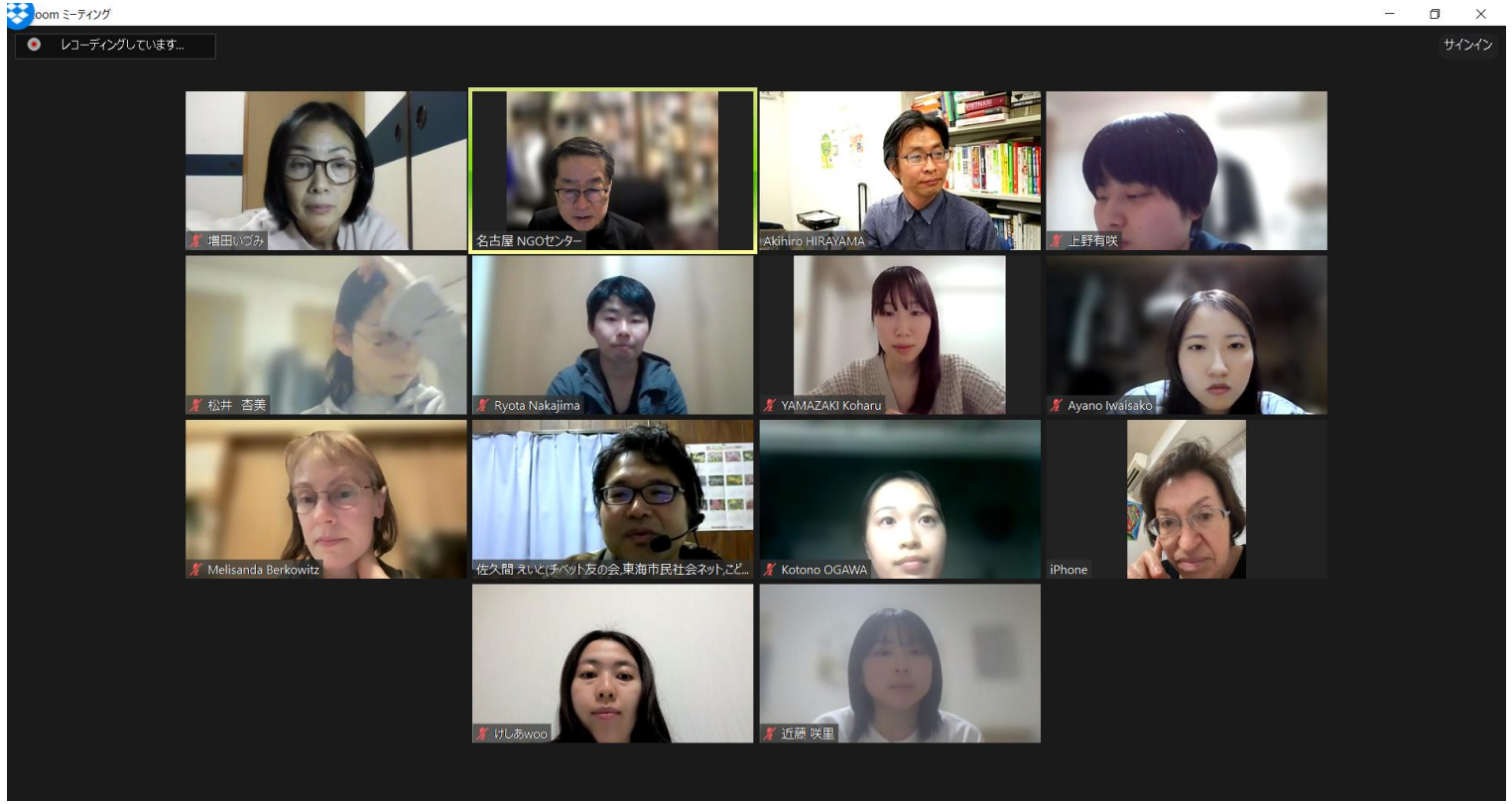
多文化共生パートナー育成講座 NGO側報告

名古屋NGOセンター

中島隆宏

2023年度多文化共生パートナー育成講座報告

- 第一回講座、第二回講座、第三回講座のコアグループへのアンケート、およびコアグループ会合（第十回）の話し合いに基づいて振り返る



2022年度の講座を終えて(コアグループ会合)

目的に照らして（橋渡し役の育成）：

・マイクロアグレッション自体ではアクションを出しにくいので、マイクロアグレッションは何回か取り組み、別のパートでアクションに関するワークショップを数回やると効果、成果があったのではないか。

対象

・ユース、大学生、高校生で多文化共生をやりたいという熱意はあるが、どこでどうしたらよいかがわからないという人。

内容・方法

・ワークショップと講義のバランス：今までにとった講義の録画を観て、ワークショップをする。

・三つの事例があったのであれば、パラレルで展開するのではなく、個々の課題について1回づつ検討して、最期に共通点を探る。

・実際の取り組み（アクション）を聞いたり、実感できたりすること。(現場訪問、インタビュー）

・マイクロ・アグレッションを寸劇で表現して、問題を議論するようなコンテンツを入れるなど。

（海外ルーツのメンバーと一緒に寸劇を完成させるプロセスを通して、実際に多文化の人と協働するプチ体験をしてもらう。）

・「ホップ」「ステップ」をみんなでやってみることを優先する。

・市民講座として大学では学べないことを明確にする、そのことに対して修了証書を出す。

・JICA中部との連携

NGO側コアグループの変遷

（コアグループの人材：input=企画・運営・実施　output　＝　橋渡し役育成）

2021年度　13名

「海外ルーツん市民とともにある日本のわたしたち」参加者　157名

- 海外ルーツ　1
- 多文化共生　4
- 中間支援　8
- ユース　0

2022年度　21名

「多文化共生パートナー育成講座」

連続講座3回修了生　22名

- 海外ルーツ　3
- 多文化共生　4
- 中間支援　8
- ユース　7

（2021年度参加者: 5 ）

2023年度　22名

「多文化共生パートナー育成講座」

連続講座ー2回目は現場訪問（全10回開催）

- 海外ルーツ　2
- 多文化共生　2
- 中間支援　7
- ユース　11

（2022年度参加者: 6 ）

外国人に関する私たちの社会の課題を理解し、人権についての意識を高める。主催者として「外国人受入・多文化共生」に関する担い手(人材)を把握する。

制度や歴史的背景、社会的課題など構造的問題があることを知ってもらい、自己を振り返り、気づき、意識を変えてもらうことで、無関心層と海外ルーツの市民や支援団体の橋渡し役をする人になってもらう。

第一回講座

第１回（基調講演＋ワークショップ）

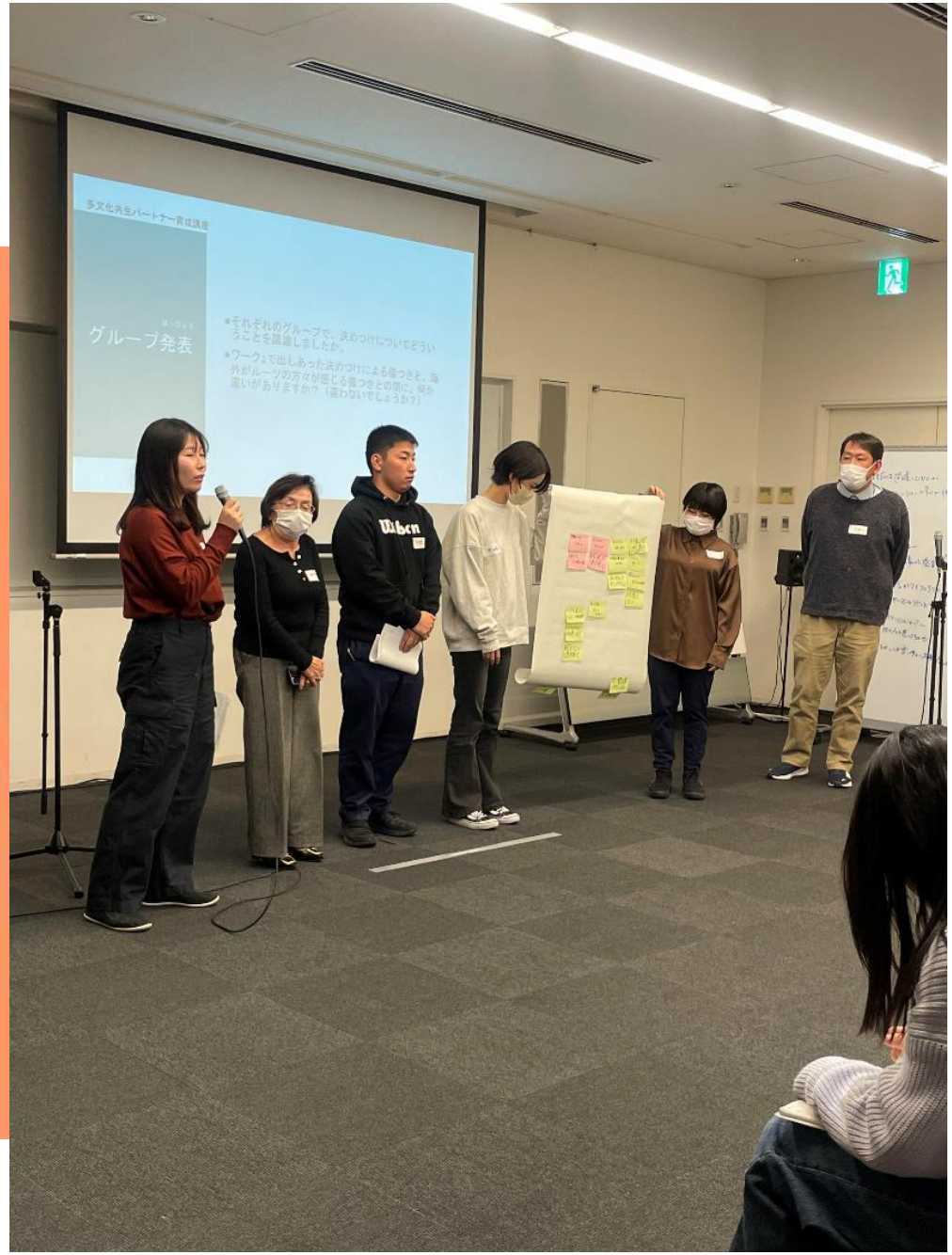
（2023年11月12日） 13時～17時 @JICA中部

金 友子氏（立命館大学国際関係学部准教授）

無意識の差別・偏見について理解し、
自己を振り返り、気づきのプロセスを持ちます。

一般の方は
第1部 オンラインのみ
参加できます！

第１部：
基調講演「マイクロアグレッション」について
第２部：
ワークショップ



参加者：21名（高校生３，大学生４， 社会人５， ユースメンバー９）

第一回講座振り返り

金先生の講演から「マイクロアグレッション」について

・相手に聞く姿勢をマジョリティ側が身に着ける、また、二人の間に立ちはだかる構造的な問題について知ること、マイノリティ側は自分の傷つきについて意思表示ができること、そのような関係性をつくること。

・マイクロアグレッションは現れ方は置かれた国(場所)によって異なるので日本人のユースも他の国や地域で経験をすることで、想像力が磨かれて、海外ルーツのマイクロアグレッションへの気づきが容易になると思う。

第一回講座振り返り

⓪　良かった点、

- ファシリとサブファシリが良いチームワークで進められたこと。理由として、サブファシリに運営側としての自覚があったこと。
- 話しやすい雰囲気であった。理由としてサブファシリや参加者が極的に話しかけていたこと。
- 外国ルーツまたは家族に外国ルーツの人がいて、異なる視点、経験を共有してくれたこと。

① 改善点としては、

- NGO側の役割分担についてJICA中部側に周知していなかった。
- ワークショップの目的など明確な指示が必要であった。

② マイクロアグレッションの理解について

- 納得できていない参加者のフォローアップが必要
- マジョリティ側の教育をどうしていくか。

一 全体的にスムースに進みまとまった。去年より長めに時間をとったのでしっかり議論していた。また、対面だったのでスムースだった。内容的には一回目でつめこまないようにした。講演については、金先生と事前打ち合わせをしておりスムースであった。全体的にうまくいった。高校生参加者もしっかり内容を理解していたようだ。

第二回講座

グループリーダー　5グループをユースメンバーで担う
参加者：20名（高校生３，大学生4，社会人４，ユースメンバー９）

第２回（現場訪問＋交流）

（2023年12月16日） 10時～17時 @豊田市

海外ルーツの人たちの生活の場、学習支援の現場を訪問して、
「マイクロアグレッション」の背景について考えます。
多様な海外ルーツのユースと出会い交流します。

訪問先：豊田市保見団地、学習支援教室 JUNTOS、
ケアセンターほみ

※事前のオリエンテーションをオンラインで行います。

第二回講座振り返り　良かった点

１ グループ

- (多様性)
  - 世代やルーツが違っても共通の話題(学校給食やアルバイトの話)を通じて全員で盛り上がることができた。
  - 高校生もいて学校の先生もいて色んな年齢、職種の方がいたので、今までの経験など経験からの自分の考えなどを共有できた点は良かった。
  - 南米ルーツ方を交えて話をした時は、ポルトガル語、英語、日本語が混じりながらも話題途絶えることなくお話しすることができ、ラフな話からこうゆうことが困ってるなど幅広く話せました。
- (当事者—日系ユースの反応)
  - 「また来たいと思えるほど楽しかった」と言って下さり、私たちの今回の活動が、ルーツを持つ方々の「日本人」に対するポジティブな印象を抱くきっかけになるという点において可能性を感じました。

第二回講座振り返り　良かった点

- （参加者、コアグループ）
  - マイクロアグレッションを学んだ私たちを前提にできた関わり方だったと思う。
  - 斎藤さんの団体運営のお話や、ケアセンター保見で伺った上江洲さん・パウロさんのお話から、団地の歴史やこれまでの日系ブラジル人としての苦労を知り、ルーツを持って日本で暮らしていくことの難しさを改めて感じることができた。
  - juntosのみなさんやパウロさんなどのお話から、活動の原動力について目の前の人や子ども達の未来を輝かせたいという思いがあることを知り、その思いに感銘をうけた。
  - 多様な背景を持つ人たちを身近に感じられただけではなく団地への固定的なマイナスイメージを払しょくできたと感じた。
  - マイクロアグレッションがどういったものなのか(どう言った言葉で人を傷つける可能性があるのか)について、理解が深められたのではないかと思う。

２．プログラムについて

・色々なアクティビティやグループを通して、1日目で関わることが出来なかった参加者とも交流ができ、講座に関わる人々間で良い雰囲気づくりがこの２日目で出来たのではないか。

第二回講座　改善点

１．共通認識

・マイクロアグレッションを前面に出すよりは、実際に当事者に触れ合うことで得る学びを重視するというような方向性に決まっていたが、それがコアメンバー間でも共通認識が持てていなかったのではないか。

・海外ルーツの方の感想として「質問攻めされた」という点は違和感を覚えた。反省として運営側において（同化してしまうｖｓ短時間で自分の内を語るのは無理があるという）「現場訪問にあたっての目標」が不明瞭だったことが挙げられる。

２．参加者サポート

・子供たちと触れ合える人とそうでない人がいて、参加者の方がもっと積極的になれるような工夫が必要。

・集合した段階で、自己紹介やアイスブレイクの時間をグループ間で挟むなどしてもよいと思った。

・周りに知り合いがいないのもあってか高校生の子がスマホを触る場面をよく目にしたので、もっと話しかけるなどフォローが必要。

３．現場訪問の心構え

・人が住んでいる場所にお邪魔しているという意識を全体に持ってもらい、もう少し周りに気を配れたらよかったなと反省している。(道路を歩くときにおばあさんが車道を歩いている場面もあったため)(祝迫)

第三回講座

参加者：２０名（高校生1，大学生4，社会人５，ユースメンバー10）、
修了生　１９名

第３回（問題分析＋アクション発表会）

（2024年２月４日） ９時半～17時 @JICA中部

海外ルーツの人々に対する「マイクロアグレッション」について、背後にある諸問題をワークショップを通してみんなで考え発見します。
これまでの学びを振り返り、小さくても自分にできるアクションを起こすことを考えます。

第１部：
問題分析ワークショップ
第２部：
アクションを見つけるワークショップ＋発表会

第三回講座振り返り　良かった点

- 北川先生が担当された部分で、私たちが今までに行ってきたことのポイントを、非常に正確に押さえてくださっていたので、そこに助けられ、きれいにまとまった。（YM）
- アクションプラン作りでは身近な課題を題材にして考えることができてよかった。
- みんなで考え現場経験もした上でのもやもやを持てた。
- 全員がマイクロアグレッションをよく理解し、その背景にある課題に取り組む姿勢を感じた。
- ロールプレイでマイクロアグレッションが起きた時に適切な対応をする練習ができ、対応する選択肢を増やすことができた。
- ワークショップでの皆の積極的な発言があった。
- 3 回目だからこその問題意識の共有と深まりと、グループ内でフォローしあえる関係があった。

第三回講座振り返り　改善ポイント

内容について

- ロールプレイで選んだ対応の仕方がMAを発信した相手との関係にどのような影響を与えるか、理解と共生につながるかを検討できると良いです。排他的にならず包摂的になれるとよい。
- 今回は言葉に焦点をあてたが、根本的な(構造的な)課題にアプローチするために何ができるかを考えるワークに繋がれば。
- ネタを日系ブラジル人版の会話に変更？フィールドは在日の方が多いところ？など、事例を統一してから一般化した方が話しやすい。
- 通称名問題についてピンと来ていない人が多かった。
- 第一回の話の内容が薄れているような気がしました。(YM)
- 問題／マイクロアグレッション分析にて、スタートと中間の分析が示されていたが、そうすると、参加者がそれに合わせようとして分析を進めてしまうことが見られたため、もう少し誘導的でないほうが良い。(YM)
- 「つながりリスト」に自分から自発的にアクセスする人はいないのではないかという気がする。ある程度、こちらで機会を用意したほうがよい。
- この講座は基礎的なものなので、次のステップに入りやすいものがあると良い。

運営について

- 途中参加者の扱いを見直し。(YM)
- 講評者の方の出番が最後だけだった。見てるだけではなく。
- イベント前日に様々な変更やお願いがあり、対応しきれなかった。(YM)
- 分科会は数週間前に決まるため、参加率が下がるのはしょうがないのかもしれないが、イベント前日に確認のMTをすると決めておいたり、イベント直前のMTでもう一度言及するなどして、皆の共通認識を向上させることは出来た。　(YM)
- 朝から晩までは長すぎる。

目的の改定と橋渡し役のイメージ
(2023年度コアグループ会合での話し合いから)

- 目的(改訂版）参加者に「①多文化共生社会の実現において、無意識の差別と偏見が人種的、民族的にマイノリティの人々へ及ぼす影響は甚大であり、その根本に制度や歴史的背景、社会的課題など構造的問題があることを知ってもらい、自己を振り返り、気づき、意識を変えてもらうことで、②無関心層と海外ルーツの市民や支援団体の橋渡し役をする人になってもらう」
- 橋渡し役のイメージ

「構造的問題の認識に基づいて、場を見て自分なりにどのように支援しなければならないかを考える人」

「マイノリティである海外にルーツのある人が受容されることによって、海外ルーツの人が自分の声、本音を話せる環境を作る人」

「ワークショップやセミナーのようなフォーマルな場だけでなく、日常の中で学び、気づきを作る、接点を作る人」

「何を目指すか、自分でこれからどのように働きたいか等、意識をして、認識できる人たちを育成していく場。相手の文化を学びながら、自分の文化も学びながら」

全体振り返り(目的に照らした達成度)

- コアグループメンバーへのアンケートおよびディスカッション

回答数１３（うちユースメンバー８）5点満点

平均　３．８４

　　5点　１，　4点　９，　3点　３

全体振り返り（目的に照らしてーよかった点）

目的１．「マイクロアグレッションが人種的、民族的にマイノリティの人々へ及ぼす影響が甚大であり、根本に制度や歴史的背景、社会課題など構造的問題自己を振り返り、気づき、意識を変えてもらう。」

- マイクロアグレッションのことを理解した上で参加者と一緒にマイクロアグレッションについて考え、参加者の経験を聞きながら互いに学びを深めることができた。（YM）
- フィールドワークを行い、マイクロアグレッションをうけている側を目の当たりにして社会のモヤモヤ、課題をあらためて感じた。（YM）
- 海外ルーツを持つ人たちと交流が深まって、海外ルーツを持つ人たちに目を向けられるようになった。（YM）
- 現場訪問を組み込んだことにより、昨年度よりも厚みをもたせることができた。
- 現場訪問は実際に目で見て、住んでいる人と触れ合ったり、その場で歴史を教えてもらうのは頭に入る。（YM）
- 団地訪問でみんなの意識が上がった。
- 普段接していない年齢や職業の人と議論をし、他者と交流をする経験ができました。（YM）
- 最初に「嫌」の境界線を考えることが良かったと思う。ワークショップを通じて、「振り返り」そして、人は嫌の境界線が違い、自分自身もある分野におけるマイノリティであるという「気づき」ができ、「意識を変える」ことで、3日目のロールプレイに取り組めたと思う。（YM）
- 全日程通して全体的にも内容の濃いものだと思いました。　　YM(ユースメンバー)

全体振り返り(目的に照らして一良かった点)

目的２．「無関心層と海外ルーツの市民や支援団体の橋渡し役をする人になってもらう。」

- 「無関心層」、或いはうっかりのマイクロアグレッションを発した相手に対して一言を言い出す練習ができました。（YM）
- 「無関心層と海外ルーツの市民の橋渡し役」は日常の中で担える位まで達成できたと感じる。（YM）
- 支援があれば橋渡し役ができるレベルまでに達した人、支援なくても悩みながらすでにできている人がいると思います。
- 今年新たにコアメンバーに加わった昨年度までの受講生は今回の講座やその企画・運営を通して橋渡し役を担える人材になっていった。

全体振り返り―改善点

運営と内容

- 人が集まらない、興味のある人たちしか来ないことが課題。
- 時間配分、プログラムの日にち間隔も再度検討する。（YM）
- 運営にもう少し携われたらよかった。（YM）
- 運営や当日の動き方などシニアメンバーに比べ、ユースメンバーの立ち位置がよく分からず橋渡し役としての行動ができているのか疑問に思った。（YM）
- 高校生へのフォローが必要。（YM）
- マイクロアグレッション（MA）の根本原因の歴史的背景についてはより理解を深める必要があると感じた。その上で今回は、在日コリアンへのMAと日系ブラジル人へのMAについて考えたため、MAへの構造的な理解は深めにくいと感じたため、テーマの統一が必要。（YM）
- １日目３日目で行ったAくんBくんのなぜなぜ分析は時間を短くして改善したり、ロールプレイをさらに入れるのもあり。（YM）

全体振り返り－目的に照らして―改善点

目的１．「マイクロアグレッションが人種的、民族的にマイノリティの人々へ及ぼす影響が甚大であり、その根本に制度や歴史的背景、社会課題など構造的問題自己を振り返り、気づき、意識を変えてもらう。」

- マイクロアグレッションについての歴史的背景や社会的な構造の理解ができていない。（YM）

目的２．「無関心層と海外ルーツの市民や支援団体の橋渡し役をする人になってもらう。」

・目標にあったような、自ら行動できるレベルまでに及んでいない。（YM）
・支援団体に参加するなどまでのレベルには達していない。（YM）
・橋渡し役にするという目的自体がレベルが高すぎた。
・3回の講座で橋渡し役になるというのは難しい。
・参加者の今後次第で、評価はあがりもさがりもする。
・人材育成は単年度では難しく、このような場を継続していくこと、参加者を丁寧にケアしていくこと、次のステップを用意することで達成できる。

修了生の声

- 「多文化共生について、こういうことが学びたいと思っていた。」
- 「いろいろな問題に対して、おもにアイセックの活動において、自分なりのリーダーシップを発揮していきたい。JICAとも何か一緒に活動をしてみたい。」
- 「そういった思いを共有して活動できる仲間を、保見フィールドワーク中に参加者から見つけることができた。」

橋渡し役のイメージの達成度

「何を目指すか、自分でこれからどのように働きたいか等、意識をして、認識できる人たちを育成していく場。相手の文化を学びながら、自分の文化も学びながら」〇

「ワークショップやセミナーのようなフォーマルな場だけでなく、日常の中で学び、気づきを作る、接点を作る人」〇

「マイノリティである海外にルーツのある人が受容されることによって、海外ルーツの人が自分の声、本音を話せる環境を作る人」△

「構造的問題の認識に基づいて、場を見て自分なりにどのように支援しなければならないかを考える人」　△